

「耳を傾けるがよい」

(ルカによる福音書16:19-31)

高級衣料に身を包む金持ちに対して、ラザロは「できもの」で身を包んでいます。金持ちが宴会を楽しんでいるのに対して、ラザロは孤独に空腹を耐えています。友だちは、不浄な動物とされている犬だけです。金持ちの食卓から落ちるものとは、残飯か、あるいは手を拭うために使った床に落とされたパンくずです。ラザロはそれで空腹を満たすことすら叶いませんでした。その境遇の大きな隔たりを象徴するのが門です。門は、金持ちにとっては貧しい他者との「大きな淵」であり、ラザロにとっては決して叶わない世界との隔りです。

ところがこの生前の境遇が、死後逆転します。ラザロは天使たちによって、先祖たちの集う宴席へと迎えられ、その祖であるアブラハムの隣、天の祝宴での最上の席に招かれます。他方、生前宴会に明け暮れていた金持ちは、陰府の炎の中で苦しみます。門を「大きな淵」としてしまった金持ちは、死後、通過不能の「大きな淵」に苦しむことになります。生前飲食を楽しんだ舌は、今や熱と渇きで一滴の水を求めています。

金持ちは、ラザロを遣わして兄弟に警告をして欲しいとアブラハムに願いますが、アブラハムは、「モーセと預言者たち」に聞けばよいと答えます。「モーセと預言者たち」とは「聖書」を表します。聖書のみ言葉を通して、すでに彼らには必要なメッセージが与えられているのではないかとアブラハムは言うのです。しかし、この金持ちはみ言葉よりも奇跡にすがろうとします。死者ラザロが復活した姿で現れれば、さすがに兄弟も悔い改めるはずだと主張するのです。しかしアブラハムは、み言葉に耳を傾けることがない人間が奇跡を見たとしても、その意味を悟ることはできないと、彼の願いを退けます。人間は、目の前で奇跡が起こっても、み言葉に聴き、心開かれていなければ、それに気がつくことはできないのです。金持ちは奇跡が悔い改めへの入り口になると考えていますが、アブラハムは、み言葉に聴くことこそが入り口だと言っています。

「門」はわたしたちの現実に、今も厳然とあります。さて、あなたたちはどう生きるのか、と主イエスはわたしたちに問うています。わたしたちには、金持ちの兄弟たちに与えられていたのと同じように、救いのみ言葉が既に与えられています。なによりもまず、そのみ言葉に「耳を傾けるがよい」と、アブラハムはわたしたちに告げています。

(司祭ヨセフ太田 信三)